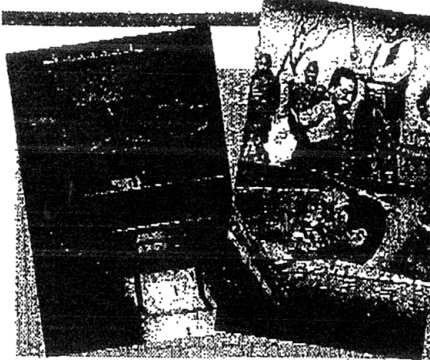


8 反日映画「靖国」は「日本の助成金」750万円で作られた



議論を呼ぶのは必ず

靖国神社のドキュメンタリー映画が、中国人監督によって作られた。中国が反日プロパガンダに用いた南京事件の「捏造写真」も挿入され、「反日映画」と言わざるを得ないのだが、何と文部科学省所管の独立行政

法人・日本芸術文化振興会から助成金が出ていたのだ。

映画「靖国」を撮影したのは、日本に長く在住する中国人の李綱監督(44)。少数で靖国神社の境内に入り、カメラを回した。

「大東亜戦争は自衛のための戦いだった」

「日本は侵略国ではない」と絶叫する軍服姿の右翼活動家をはじめとして、旧軍人、戦没者の遺族、星条旗を持って境内入りを試みた米国人男性、靖国に合祀された祖霊を返せと訴える台湾人女性、小泉元首相参拝の反対を訴えて暴行を受けた男性など、靖国を訪れる様々な人々を撮影。小泉

元首相の参拝シーンや集会で演説する石原都知事も収録している。

その一方で本作は、戦前靖国神社内で作られていた「靖国刀」の刀匠(90)を登場させ、靖国のご神体である「靖国刀」をクロースアップ。

こうした珍しい靖国神社の記録は、中国人監督の劳作と言えなくもない。しかし、首を傾げざるを得ないのが、「南京事件」の「百人斬り競争」の新聞記事を紹介している点。加えて、この映画の締めくくりに、昭和天皇が靖国神社に参拝する記録映像と、中国がしばしば南京事件の日本軍の蛮行として引き合いに出す

「証拠写真」が相前後するように使われている点だ。その反日メッセージは、露骨なまでに強烈なのである。李綱監督は中国紙のインタビューにこう答えている。「この映画には私の強い主観的なものがあり、私はできるだけそれを抑制したが、ドキュメンタリー映画を客観的なものにするのは不可能である」

「作家性を尊重」

「南京事件「証拠写真」を検証する」(草思社刊)の著者で、亜細亜大学の東中野修道教授はこう語る。「刀を持って、僧侶らしき人物を斬ろうとする写真を検証すると、写っている人物の影の大きさ、太さが一致しなかったり、足の出し方が反対だったり、明らかに捏造写真と思われるものです。タバコを啜えた生首の写真は、1938年の雑誌『ライフ』に掲載されました。日本軍がやったように書かれていましたが、果たして本当に日本軍の作業なのか、この写真が南京で撮られたものか、誰が撮影

したのかさえ不明です」
李綱監督に、南京事件の「捏造写真」を使った真意を尋ねると、代わって宣伝会社がこう回答した。「監督は、捏造写真ではないとの確信を持って使用したと言っています。また反日映画として撮影したつもりはないし、その写真だけで反日映画と断じられるのは不本意です」

この記録映画には、文科省所管の日本芸術文化振興会から、平成18年度の助成対象活動として750万円が出ています。独立行政法人とはいえ、政府が拠出した基金からの運用益だ。

助成金を出した日本芸術文化振興会はこんな説明。「記録映画は社会性、政治性などのメッセージ性が強い作品が多く、『靖国』についても相当議論されたようです。しかし専門委員会では、完成確認でも疑義があったわけではない。企画書から大きく違っていない以上、作家性を尊重する観点から、ここがおかしい、あそこを修正してほしい、と

は言いません」(基金部)

再び東中野教授の話。

「記録映画に、捏造された

写真や不確かな写真を挿入するのは禁じ手です。元は税金なのですから、返して

いただきたいですね」

反中映画に、かの国で助成金が出ることはあるまい。